
オタクに恋する！

Tania Racco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタクに恋する！

【Nコード】

N9209R

【作者名】

T a n i a R a c c o

【あらすじ】

何の目的もなく高校の定時制に入学してしまったボク。入学式を終え教室に向かう時には、すでに学校をやめる決意をしていた。

そのとき、ボクの目の前に1人の少女が現れて……

入学！（前書き）

初めての投稿です

誤字脱字があっても気にしないでくださると
とてもありがたいです

入学！

「うぜえ」「眠いんだけど」「チョーウザい」

周りのヤツらは口々に文句を言いながら歩き、互いに睨みを利かせて牽制しあっているようだった。

ハア……不良ばっかじゃん……。

夜の学校で春にも関わらず冷えきった体育館の中で行われた入学式を終え“1-A”のクラスの中に居た僕は、教室に戻る時に周りのヤツらを観てホームルームが終わったら、この高校を“中退”しようと思いついた。

まあ辞める理由は特に無いんだけど、通う理由が在るような学校には、もっと思えないしな……。

県立西崎高等学校“定時制”に入学した僕は、そんなコトを思っている。

教室の目の前でヒゲ面のチンピラと髪の毛の長い細身の女の子が道を塞いで何やら騒いでいる。

どうやらヒゲ面が女の子に何やら怒鳴っている様だった。

おいおい教室入れねーじゃん、どーすっかな、回り道するか……。初日からのハプニングは避けたいし……。

てか、あのヒゲ面、教師か？生徒には見えないけど、

「ぶざけんな……！」

おいおいヒゲ面、声デカ過ぎだつて　？てか、女の子泣いてんじやん……。

ハア……。

「女の子泣かんすなよー!!」

ダツダツダツダつと走る音がしたと思うと「ドカツ」っと景気の良い音がした。

何者かがヒゲ面にドロップキックを入れ2 m程吹っ飛ばしたのだ。

初日からなに騒いでんだか……。

まあ、

犯人は“ボク”なんだけど……。

悪い癖が出てしまった、昔から「女の子を泣かすな!」と耳にタコができるほど言われたせいかな？

僕は職員室に連行され事情聴取1時間の果てに解放され職員室をあとにしよつとし

扉を開けると、さっきの女の子が立っていた。

この子も事情聴取か？

あ、退学すんの忘れてた、明日にするか。

「あの……」

「どうぞやら僕を呼んでいるらしい。」

「な……何ですか？」

「敬語は二ガテだ。」

「さっきはありがとうございました」

「いえいえ、当然コトをしたままでです」

「ヤバйкаツコ悪い！ カツコつけたのに！！」

「それでも、助かりました」

「通りかかったただけですから」

「何言っつてんだ僕は！」

「そ、それより何です教室の前で揉めてたんですか？」

「あ、それは……」

「ん？」

「それは、携帯のアドレスを聴かれて携帯を持ってないってウソ付いたんだけどバレちゃって……」

「そ、そっかあ……」

「しょうもな……。」

「あ、あの」

「何ですか？」

「友達になってもらえますか？」

えーーーーー!! なぜ? いきなり?

「私中学あまり行ってないから友達いなくて……ダメですか?」

「よ、よろこんで」

それを聞くと女の子はニコつと笑って

「それじゃ明日からヨロシクね」

駆け出した女の子はカバンを忘れていってしまった。

それを拾い上げ名前を探すと『佐々木彩音』と書いてあった。カワイイ小さな字だった。

ささき あやねって名前なんだ、明日渡すか……。

こうして僕の“中退する決意”は早くも終わりをむかえ 我ながら安い決意だと思う 夜の学校での生活がはじまったのである。

自己紹介！

「はぁ、疲れた」

「おかえりなさい、お兄ちゃん」

「ただいま、新しい中学はどうだった？」

「まだ、初日だから……でも大丈夫だよきつと」

学校が終わり家に着いたのは11時の事だった。

まあ定時制は私服登校だし、深夜徘徊で職務質問される心配無
かな。

定時制の学校とはいえ9時に終わるのだが、この学校から帰って
来たボクを出迎えたカワイイ妹に頼まれていた。

“アル物”を買いに行っていて帰るのが遅くなってしまった。

「お兄ちゃん、頼んだ“アレ”は？」

「ハイハイ、コレだろ？」

ソレを受け取った妹は目をキラキラ……いやギラギラさせながら
ソレの中身を取り出した。

「わーい、ありがとネ！ お兄ちゃん」

そしてソレに頬擦りをしながら自分の部屋戻ってしまった。

喜んでくれるのは良いけど、意外高いんだよな“小説”って……。
本はよく分からないから、タイトルを店員に聞いてみると変な顔
をされ、連れて行かれたコーナーには“何故か”女の子しか居らず、
表紙には“何故か”男が半裸で寝ている物ばかりだったな……。

おっと、そんな事より早く風呂入って夜食を食べるかな。

ちなみに、僕の家は3人家族だ。

親が離婚して僕と妹はそれぞれ別々に暮らしていたが、一年前に父親が死んだために妹とまた暮らす事となった。

妹は父親が死んだ事が、かなり辛かったようで、引きこもりになっってしまった。

最近は大分落ち着いて、中学3年生からは転入した学校で新しい環境で頑張ると妹も意気込んでいる。

母はファッションデザイナーとして働いていて、なかなか家には帰って来れない。

だから家事は殆ど妹がしてくれている、本当に有難い話だ。

ふう、もう寝るか明日からは、バイトと学校が本格的に始まるかな。

そうして、部屋の電気を消して僕は眠りについた。

「……きて……起きて、お兄ちゃん!!」

「うーん……」「起きてよ!!」

妹はそう言って布団を引っ張りはがした。

「ぐわあ!!」

勢い余ってベツトから落ちた僕を見て妹は訪ねてきた。

「今日はバイトだね、どうしてまだ寝てるのかな？」

「迅速にバイトに行つて参ります」

こうして初日から遅刻し、バツとて1日タダ働きをした僕は、そのまま学校へ向かった。

学校に着いた僕はとりあえず食堂へ向かった。

定時制の1日は授業の前に食事を取り、それから授業の時間は50分×4教科で成り立っている。

まだ、食堂は初日だからか1年生は少なく他学年が友達やカップルで食事を取っていた。

しかし、やたら金髪やら茶髪が多いな。

定時制は高校の資格を取る事だけを目指としている人が多く、過去に高校に入学せずに社会人に成った人間が、他の資格を取る為などの理由で、入学するケースがあり今年の新入生の中にも成人らしき人が数人いたように思える。

そのせいか校則は緩く、髪の色や服装の制限が曖昧だ。

例えば、髪は“奇抜でないもの”で、服装は“学生に適したものとだけ生徒手帳に書かれている。”

だからって、皆が皆髪を毛染めて、服装をそんなに派手にしなくても……。

見渡すと俗に不良と呼ばれる人間が8割りを占めていた。

ハア……。

さてと、ここらで食べるかな。

中学が同じだった奴が1人もいない僕は1人で四人がけの椅子で食事をする事にした。

食べ始めてから5分たった頃“あの子”が現れた。

服装は今時の女の子とは違い、なんと、ワンピースだった。

ワンピースって……。

しかもモコモコの手袋、マフラーの異色のコラボ!!

タダでさえ不良の多い学校で、そんな服装してたら目立つたる…
…。

周囲がその女の子 佐々木彩音に注目しているのは、明らかだった。

その視線に気付いたのか、佐々木彩音もソワソワしている様子だ。

仕方無いな……。

「おい、こっちこっち」

僕の声に気付いた佐々木彩音はこっちに来てくれた。

「おはようございます」

「おはよう」

もう夕方なんだけどね……。

「何か、怖い感じの人達ばかりだね」

「確かに、そうたけど目立たずにいれば平和に過ごせるって」
「でも……昨日は凄く目立ってたと思うけど……」

そうだった忘れてた、そう言えば昨日のアイツ何者だったんだ？

「そんな事より、なんて呼んだらいい？ 君のコト」

「彩音で良いよ、そうだ私たち、まだ自己紹介して無いね」

あっ！

「ゴメン今思い出したけど、彩音さんが忘れてった鞆だけど、僕が昨日拾ったいたんだけど……」

「ありがとう、昨日から探してたんだ」

「家に忘れてしまった……」

「そうだったんだ、別に良いよ今日は授業らしいもの無いしね」

そんな事を話して食事していると、あっという間に時間が過ぎて授業の時間になってしまった。

教室に入ると、僕らを含めて5人しかいなかった、男2人に女3人だ。

席を確認すると僕と彩音さんは、なんと隣同士だった。

席に着くと、すぐにチャイムが鳴り急ぐ様子も無く数人の生徒がゾロゾロと教室に入って来た。

クラスメイトは全員で40人居るはずだが、空席待ちが目立つ。

遅れてスーツを着た女性が入って来た、どうやら担任らしい。

けっこう若く見える。

名前は原口真理子で、教科は英語を受け持つらしい。

そして、高校生活の初めての授業は“自己紹介”だった。

理由は担任が名前を覚える為と、初日は教科書を受け取るだけで、他にやる事が無いからだという事だった。

名簿順に挨拶が開始された。殆どが名前と出身校しか言わず座ってしまっていたが、なかなか個性の在る奴が多く聞いているだけでも面白かった。

「はい、じゃあ佐々木さん」

「は……はい、私の名前は佐々木彩音です、出身校はH中学です。

好きな物は、小説とアニメと漫画とコスプレと小説とアニメとネコちゃんです……！」

個性だけなら彩音はクラス……いや学校で1番に成れそうだった。てか、小説とアニメ2回言ったよな、それだけ好きなのか？それとも、緊張しちゃったのかな？

お、そろそろ僕の番か、

「僕の名前は……」

ガラガラガラ

突然教室の扉をが勢いよく開いて男が1人ズカズカと入って来た。そいつは僕の目の前まで来ると、

「よう、俺が副担任の跡部だ、1年間よろしく頼むわ」

と言って、「ヒゲ面のチンピラ」はニヤツと嫌な笑みを浮かべた。

自己紹介！（後書き）

誤字脱字や小説の意見、アドバイスが有れば感想やメッセージで教えて頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9209r/>

オタクに恋する！

2011年10月8日22時29分発行